

地理学・地政学から見た北海道

押 谷 一

はじめに

公益社団法人北海道地方自治研究所の設置する「北海道近現代史研究会」は、北海道の近現代史を多角的な視点からあらためて調査・研究をするという目的のもと、北海道命名一五〇年の節目を迎えた二〇一九年度から活動を始め、以降、道内各地の史跡等の現地視察や、学習会の開催などを柱に、すでに四年にわたって活動が続けています。本日は第九回目の学習会という位置づけになります。

今回のキーワードとなるのが、「地政学」という視点です。私自身、かつて本誌（二〇二〇年七月号）に「北海道の自治に関する地政学的視点からの論考」という小論を寄稿し、ここでこの地政学という言葉を使っています。

地政学は地理学の一分野です。地理学はそもそも、地球上の表面に存在する地形や様々な物事を、

人間の営みや歴史も含めて関わりを整理し説明する学問です。そして、一口に地理学といっても、いくつかの下位分野に分かれており、その一分野である政治地理学は、地政学の名で近年あらためて特に関心を集めるようになっていきます。地政学という言葉は地理学に政治学を掛け合わせたものであり、特に国際的な政治情勢を対象として扱います。例えば、二〇二二年二月に始まり現在も続いているロシアによるウクライナ侵攻についても、その侵攻の動機には地政学的な思考が働いているという指摘があります。

北海道近現代史研究会の設置は、先述のとおり、北海道命名一五〇年を契機としています。北海道は約一五〇年前、一八六九（明治二年八月まで、江戸時代の幕藩体制のもと、蝦夷地などと呼ばれる異国の地でしたが、明治維新（一八六八年）から程なく北海道と命名され、日本の領土に組み込まれました。日本にとって一八五〇～六〇年代という時期は、欧米の諸外国からの開国要求という

外圧を背景に、内政体制も大きく変わり、一七世紀初頭から約二六〇年続いた幕藩体制が廃され、天皇親政を特徴とする近代国家体制へと転換する時期に当たります。これらの出来事が同時に起きたのは、内政的にも、諸外国との関係においても、蝦夷地・北海道が地理学的・地政学的視点から非常に重要な地域であると明確に認識され始めたからです。

こうした前提に立ち、北海道近現代史研究会ではこの間、北海道あるいは北海道の自治の近現代史を、地理学・地政学の視点も意識しながら、歴史的な事実を把握し、課題を整理する作業を進めてきています。本学習会では「北海道の地理的状況と地政学」というタイトルのもと、この北海道という土地に備わっている地理的条件について、「地理学」と「地政学」という二つの視点から見てどのような特徴を指摘しうるか明らかにすることを目標としています。

1. 地理学とはどういう学問か

地理という科目は、小中学校では社会科の中でその一端を地図を通して学ぶほか、高校では、日本史、世界史、政経とともに社会科の選択科目の一つとして位置づけられてきたものです。長く選択科目の一つに過ぎなかった地理ですが、昨春（二〇二二年度）より「地理総合」という名称で高等学校の必修科目に変更になりました。地理（学）の必修化の背景には、地理学という学問の持つ価値が、社会や生活の状況の変化を受けて、再認識されたことがあると思います。

地理学という学問は、地球上で行われている人間の諸活動と自然との関わりを探索の対象としています。例えば、エネルギー産出国と政治の関わり、異常気象や地球温暖化と産業や生活との関わり、自然と人の行動の関わり、といったことです。生活や産業活動の場となる地域の特徴によって、人々の生活スタイルは大きく変わってくるものです。日常生活や経済活動に関わる事柄で地理学に関係しないものではなく、現在はグローバルな視点（地球的な視座）で地理学的な事実を理解することが個々人の生活や経済においてますます求められるようになっていきます。現在の地球上の状況や課題を発見し、整理するためには、地理的な視点は非常に重要です。自然現象と人間の様々な真実と相互作用、自然と文明・文化との結びつき、人間と人間の関係に関する現状や課題を解明するた

めの学問が地理学であるとも言えます。

地理学は自然科学と人文科学の両方に近接しているという特徴を持っています。しかし、近年、人間と自然（生態系）にまたがった生態学（環境学）などが注目を集めていることや、社会学、経済学、工学、医学などの既存分野においても自然科学、人文社会学という区分の垣根はなくなり、他の領域と複合することが多くなってきています。自然科学と人文科学への近接性という特徴は、もはや地理学だけが独占するものではなくなっています。その意味では、学問分野的には地理学はいわば「絶滅危惧種」かもしれませんが、私としてはこの学問に魅力を感じています。食べ物の嗜好、信仰、政治など、人類の文化は多くの要素が絡み合っていており、これらを探索の対象とする地理学もあらゆることと関係しうる幅の広さを持っているからです。

2. 近代地理学の確立に至るプロセス

(1) 発展の原動力とプロセス

歴史を振り返れば、世界各地の状況を実際に自分の目で見て、様々な人々と話を聞く作業（フィールドワーク）が新たな発見を獲得させ、その蓄積の上に地理学という学問は発展してきました。その原動力は、人間の持つ好奇心や冒険心、食欲などの欲望によります。好奇心や欲望を満たすため

に地理学という学問分野はつくられ、「地図を作成すること」と「地域の状況を記述すること」を目的とするようになりました。自分の住んでいる場所のことを正確に知覚し、世界をよく知ろうとすることは人間の本能です。一四世紀にアラブ世界で活躍したイブン・バットゥータ (Ibn Batuta 1304-69) は、「旅行に固執する精神、鳥が巢を見捨てるように、私は住居を捨てた」という言葉を遺していますが、今いる生活の場から飛び立っていくことが人間の本質であると述べていると解します。

地理学は人間が世界的空間への認識を拡大していくことに伴って発展してきました。

歴史を遡れば、古代文明の時代には、例えば古代ギリシャの詩人ホメロス (Homer) のように、遠く高い山の向こうや大海の果てには巨人や巨大なタコなどの怪物がいると語るなど、まだ見ぬ世界を叙事詩（物語）として描くということが行われていました。ヨーロッパ世界では地中海の航行が、アラブ世界ではキャラバンが交易によって地域を結び付けていましたが、こうした時代にあっても、大部分の人々は農業空間、すなわち、地平線で区切られた狭い村落世界を自らの世界として生活していました。

こうした状態を脱し、人間が世界的空間への認識を持つようになるのは、一五世紀半ば以降、ヨーロッパの国々が帆船を改良し、羅針盤を発明して、アフリカやアジア、アメリカといった、海

の向こうの未知の世界に向かって乗り出して行つてからのことです。大航海時代と呼ばれるこの時期は一七世紀半ば頃まで続き、この間に大規模な航海と征服を続けました。その間には、歴史学の見解に従うならば、知識欲というよりは、金銭欲、宗教的伝道、冒険心にあつたとされます。これ以降、獲得しうる食料の種類・量が増大し、人口が飛躍的に増加するとともに、人々が社会を形成し、指導者が登場して政治が発展するようになりました。さらに近代以降になると、ヨーロッパで産業革命が起き、輸送手段の拡大もあつて、グローバル経済が急速に確立されていきました。

こうした歴史の流れの中で、地理学は、離れ離れの民族や大陸や島々を結ぶ知識と経済によつて発展していったのです。とりわけ中国やヨーロッパ諸国による文字、紙、印刷技術などの技術の発明などが地理学の発展を支えました。

(2) 学問としての大系化への助走（一八〇一―一九世紀）

一八世紀になると、ハワイ諸島に到達したジェームズ・クック (James Cook 1728-79) などの探検家たちが活躍した時代ですが、この頃に地球の規模の空間の中に人間を置く地理学が発展し始めるようになります。

一八世紀ドイツの哲学者として知られるインマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804)

は、実は自然地理学者でもありましたが、「歴史学は時間に関して前後して起こった出来事にかかわる。地理学は空間に関して同時に起こる現象に関わる」とし、地理学を「事実を空間関係、立地、広がりのおかげでとらえる研究」と定義していました。

あわせて、この時代には、太陽や星の角度によつて緯度を計測する六分儀や、経度を計算するため重要なクロノメーター（高精度時計）などが発明されたことにより、航海は冒険から緻密な計画に基づく行為に変化しました。

一九世紀に入ると、ヨーロッパから軍人、宣教師、学者、冒険者といった多くの人々がアフリカ大陸やアジアへと実際に赴き、各地域の状況を詳細に調査し始めるようになります。その目的には植民地分割の準備を進めるためという側面もありました。

こうした状況下、従前は冒険として行われてきた航海や探検は、自然現象に関わる数多くの学問領域を説明することを目的に据えられ、学者や専門家による科学的遠征へと変容していきました。あわせて、新たな発見の場所に行くための航路や手段を他者に伝達することが求められ、正確な地図の作製や文章記録の作成が積極的に行われるようになりました。

この時期の探検家としては、アフリカ大陸を横断したイギリスのデイヴィッド・リヴィングストン (David Livingstone 1813-73)、初めて南極点

への到達に成功したノルウェーのロアル・アムンセン (Roald Engelbregt Gravning Amundsen 1872-1928) などが挙げられます。

その後、一九世紀後半に至つて、科学としての地理学が体系化され、明確になります。地理学の体系化に尽力した学者としては、「近代地理学の祖」とされる以下の二名が挙げられます。

一人目は、ドイツのアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt 1769-1859) です。フンボルトは一八四五年から一八五八年にかけて著した『コスモス』（全四巻）という論文集で、科学者としての視点から、自然現象と人文的な諸活動の結びつきを明らかにしています。

二人目は同じくドイツのカール・リッター (Carl Ritter 1779-1859) です。リッターは『地理学』という著書で広く知られています。彼は哲学的な視点から、環境と環境を変えうる人間の関係、現実の世界を理解するために歴史的・社会的事実が重要であることを指摘しました。

(3) 地理学の確立

一九世紀後半以降、前出のフンボルトやリッターの功績を基に、「地理学」という学問分野の定義・体系化が本格化していきます。

地理学は英語ではジオグラフィ (geography) と言います。言葉の構成から言えば「地表で起きている現象を描くこと」を意味します。

その定義・目的は、地球表面部の物理現象、自然現象、人類活動を総合的に研究する学問分野であるとして、先ほども述べたとおり、総体的な特徴として、自然科学分野の地球科学、生態学、気象学、地質学、地形学、水文学など、人文社会科学分野の歴史学、社会学、政治学、経済学などと隣接しています。

下位分野としては、まず「系統地理学」と「地誌」の二つに大別され、前者はさらに「人文地理学」と「自然地理学」に分けられます。人文地理学では人口、集落、都市、経済、政治、民族、交通などを、自然地理学では地図、気候、地形、海洋、水文などを、地誌では地域ごとの自然・文化・産業立地の特徴などを、それぞれ扱います。

3. 地理学から地政学が派生する背景

(1) 二〇世紀の時代状況

二〇世紀を第二次世界大戦が終戦を迎えた一九四五年で前・後半に分けると、前半は帝国主義国家による植民地支配の拡大や侵略が続き、世界各地で幾度も戦争が勃発するなど、前世紀までとは比べようもないほどの激動の時代になりました。

二〇世紀前半がこのような激動の時代になった前提として、一九世紀に地球上の地理学的な現象がほぼ全て把握され、ヨーロッパの列強諸国がアジアなど世界各地へ進出していく足掛かりになっ

たということが言えます。

また、二〇世紀後半には、世界大戦こそ起きなかったものの、それまで植民地とされていた国々の独立、米ソ冷戦、ソ連の崩壊、食料・エネルギー・鉱物などの確保のための（資源ナショナリズムに基づく）軍事行動などの出来事が見られました。日本史あるいは北海道史に引きつけて見ると、明治維新・北海道命名から一五〇年（一八六九～二〇一九年）の期間で、ちょうど半分（七五年）の時期にほぼ重なるのが第二次世界大戦終戦の時期に他なりません。歴史学の時代区分において近代と現代を分けるのもこの第二次世界大戦の終戦前後です。日本史を明治維新・北海道命名から一五〇年という時代区分で見れば、前半は日本が国として近代化に成功した時代、後半は敗戦後の現代史という意味を持ちます。

(2) 二〇世紀前半の地理学

二〇世紀前半期の地理学の動向を振り返ると、以下のような状況が見られました。

まず前提として、前出のカル・リッターがベルリン大学に招聘されて地理学を講義していたのが一八二〇年から死没する一八五九年までですが、リッターはこの時期、士官学校でも地理学の講義を行っていました。地理学が軍事学の一分野としても関心が持たれていたことがうかがえます。軍事学の一環として地理学は重要であるとの認識は、二〇世紀に入っても引き継がれていました。特に戦争が起きた場合、敵国の様子を把握するための地図の読図、地理学的知識の修得は軍事的に重要であったからです。特に地政学という視点は、軍事侵略的な色合いが強く、第二次世界大戦時にはナチス・ドイツの侵略行為に正当性を与える役割を担うなどしていました。

4. 地政学とは何か

(1) 地政学の本旨

地政学は大きくは英米系地政学と大陸系地政学の二つに大別され、前者は英語でジオポリティクス (geopolitics)、後者はドイツ語でゲオポリティーク (Geopolitik) といいます。いずれも地理学 (geography) に政治学 (politics) を掛け合わせて便宜的につくられた言葉であり、特に地理的な条件に注目して、軍事や外交といった国家戦略、国同士の関係などの政治的問題を分析、考察する学問などと定義されています。地理学の下位分野では人文地理学の中の政治地理学に最も近接していますが、特に国際関係に着目するものであり、従来の国際関係論あるいは国際経済学の領域の進化形とも言えます。

先ほどご紹介したとおり、地政学は一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて形成され、戦前期や戦時下ではドイツ、イギリス、日本、アメリカな

どにおいて、自国の利益を拡張するための方法論的道具として用いられていました。各国において人口が増加していくと、より多くの食料・エネルギー資源を確保するために、農地や領土の拡大が必要になり、植民地の確保や他国への侵略が必要になるからです。第二次世界大戦後、地政学は先述のとおりナチス・ドイツの侵略行為と結びつきがあるとしてしばらく忌避されてきましたが、経済のグローバル化が進んだ現代社会にとって有意義な視点を与えてくれるものとして、近年は特に英米系地政学への関心が高まっています。

例えば、「引越しのできない隣人同士」である日本と中国の間では、海の領有権をめぐる争いが続いています。国は個人宅と違い、隣との関係が良くないからといって、他所に転居するわけにはいきません。仲が悪い隣国との関係をどうするか、その解決策としては、「互いの生活・文化を尊重して最善の解決策を探る」か、「欲望と憎悪によって暴力的に解決する」かの二点が想定されます。地政学は、後者を進めるために、他国の領土や資源を支配することを正当化する理論であったことから忌避されることもありました。

(2) 地政学（英米系地政学）のキーワード

英米系地政学の中でキーワードになっている言葉を以下にいくつか紹介します

第一は「シーパワー（Sea Power）」です。国家

が海洋を支配し、潜在的、顕在的に海洋を活用する能力のこととされます。シーパワーの高い国としては、かつての大英帝国やスペイン、ポルトガル、オランダなどが該当します。そもそも国土が海に囲まれているという地理的な条件に拠って、海洋に進出し、海洋を活用することが比較的容易であり、さらに海軍力も高いこれらの国々は、シーパワーが高いということです。

第二は「ランドパワー（Land Power）」です。かつてのモンゴル帝国や、現代ではロシアや中国など、ユーラシア大陸において広大な面積を有する大陸国家は、陸続きの大地に国境を接している周辺国家に対して強い影響力を持ち、領土拡大をめざすときは、高い陸軍力を用いて国境を侵し戦争を起こすことになります。このような大陸国家のあり方をランドパワーといいます。

ただし、大陸国家がランドパワーの限界を超えて拡大しようとするならば、シーパワーの拡大が不可欠です。不凍港の獲得をめざし、近代から現代に続くロシアによる黒海・クリミア半島および極東の北海道近海への進出や、近年の中国による「二帯一路」構想などは、大陸国家によるシーパワーの拡大戦略として理解できます。

第三は「ハートランド（Heart Land）」です。イギリスの地理学者で、英米系地政学の理論的代表者とされるハルフォード・マッキンダー（Sir Halford John Mackinder 1861-1947）は、ロシア帝国がユーラシア大陸において占める領域を

ハートランドと表現し、このハートランドを制した国がユーラシア大陸の支配者であると述べました。ハートランドであるロシア（ロシア帝国、ソ連、ロシア共和国）は、寒冷な気候帯に属する国土の大半が農耕の困難な土地であるため、食料や資源を求めて西や南への膨張を志向し続けており、ヨーロッパ諸国などに対して脅威であり続けています。現下のウクライナ侵攻の目的もこうした文脈で理解が可能です。

第四は「リムランド（Rim Land）」です。ニコラス・スパイクマン（Nicholas Spykman 1893-1943）の提唱によると、「リムランド」とはハートランドを包囲する周辺地域を意味します。そして、こうした考え方をもとにハートランド＝ロシアの拡張を外輪（リム）＝周辺国家で囲って防衛しようという構想が生み出されたのであり、第二次世界大戦で疲弊した西ヨーロッパ諸国がソ連に對抗するために、アメリカの軍勢力を背景に「NATO（北大西洋条約機構）」を誕生させたのも、リムランドの考え方にに基づきます。

なお、かつてはソ連の構成国の一つであり、隣接するウクライナがNATOに加盟してしまうことは、ロシアにとっては自らの拡大を抑止するリムランドの強化を意味し、このこと自体がロシアにとっては領域を侵されることから、ウクライナを支配下に置くために、現在軍事的な侵攻を進めているのです。

5. 日本および北海道の地政学的な位置

最後に、地政学の視点から日本および北海道はどのような立ち位置にあるかを考えてみたいと思います。

日本という国は、幕末期の開国後、四方を海に囲まれ、南太平洋まで広大な権益を有する典型的な海洋国家、シーパワーの国であると自己認識していました。その後、日清戦争（一八九四～九五）などを機に中国大陸に進出（北進）し、満洲国の建設（一九三二～四五年）などにより大陸国家を形成しようとする一方、海洋国家としての拡大も続け、インドネシアの石油や、ビルマ（現在のミャンマー）、マレーシアなど東南アジアの資源確保のために南進も並行して進めました。こうしたなかで、太平洋戦略の仕上げとして中国大陸の権益の確保を欲していたアメリカと戦うことになり、太平洋戦争（一九四一～四五年）を開戦して、これに敗北しました。

なお、アメリカの強さの源は、広大な国土と、大西洋と太平洋に接していることから、ランドパワーとシーパワーを兼ね備えていることに一因があります。それは強大な陸軍と海軍を同時に維持することを意味しますが、財政的なコストがかかりすぎる状況を生みます。国が海洋国家と大陸国家を長期にわたって兼ねることは不可能だということ、モンゴル帝国が海を越えて日本に攻め込むことに失敗したことのように、歴史からの教訓

があります。他の領域を侵略する要因については、地政学的に分析することが重要であるといえます。

北海道周辺海域、特に北方四島の周辺は、第二次世界大戦終戦期のソ連軍侵攻により今日に至るまでソ連・ロシアの実効支配を受け、平和条約の締結、北方領土返還問題という国境問題が未解決のまま続いています。北方領土は地政学の視点から以下のような状況にあることを指摘できます。

まず、日本列島はユーラシア大陸にとってどのような位置にあるかと言えば、日本周辺の地図を南北逆さにして見るとよくわかりますが、ロシアや中国といったユーラシア大陸の東端の国にとっては、太平洋に進出しようとする際に、アリューシャン列島、千島列島、日本列島、先島諸島という列島の連なりによって蓋を被されたような状態になっており、出口を塞がれています。つまり、太平洋進出にとって邪魔なのです。両国にとって、太平洋進出のために、できることならば、日本を侵略して、日本全土は無理だとしても、北海道だけでも自国の領土にしたいと考えているはず。第二次世界大戦の終戦を意味する「ポツダム宣言」を日本が受諾した直後、ソ連が「日ソ不可侵条約」（一九四一年三月締結）を一方的に破棄して当時日本領であった南樺太や千島列島に侵攻してきたのは、北海道の半分を占領したいと考えていたからです。それはロシアが黒海に進出する拠点としてクリミア半島の自国領化を進めてきたロジックや、中国が尖閣諸島や台湾を領有した

いと考えるロジックと共通しているのです。

第二次世界大戦後の日本政府の対応を見て私自身思うのは、地政学的な思考がまったく十分ではないということです。地政学の視点をもって周辺諸国との国際関係を見通していく姿勢は今後ますます重要になっていくと思います。北海道に対する日本政府の扱いは近年、財政的に縮小傾向ですが、周辺諸国の脅威あるいは資源問題を考えるとき、地政学的な視点を踏まえるかどうかで、北海道に対する見方も大きく変わってくるものだと思います。いたずらに日本、とりわけ北海道への軍事的脅威を示すつもりはありませんが、地域の安全保障について真剣な議論が求められると考えます。北海道の地政学的な重要性を、政府はもとより、北海道が自ら認識することが重要であることを述べておきます。

へおしたに はじめ・酪農学園大学名誉教授

本稿は、二〇二三年三月二七日に開催した、北海道近現代史研究会・第九回学習会の内容をまとめたものです。 文責・編集部